

ついにヴェールを脱いだ天才 横須賀功光の写真魔術

光と鬼



2005年11月19日(土)～12月18日(日)
 東京都写真美術館 2階展示室(恵比寿ガーデンプレイス内)

10:00～18:00(木・金曜日は20:00) 入館は閉館前日の90分前まで 休館日:毎週月曜日 一般 800(540)円 学生 700(540)円 中学生(65歳以上) 600(480)円
 ※1:20名以上の団体および東京都写真美術館友の会 小学生以下および障がいをお持ちの方とその付き添い者1名は無料 ※2:3日曜日は65歳以上無料

主催:横須賀功光の写真魔術展実行委員会 後援:東京都写真美術館 朝日新聞社 産経新聞社 読売新聞社 毎日新聞社 日本写真家協会 社団法人日本写真家協会
 協賛:社団法人日本写真家協会 東京都写真美術館 協賛:読売新聞社 産経新聞社 朝日新聞社 毎日新聞社 日本大学芸術学部校友会 株式会社パルコ
 株式会社アイマガリーン 富士写真フイルムインターナショナル株式会社 協力:VOGUE JAPAN 株式会社MUSEUM OF MODERN ARTS 株式会社文化放送 株式会社ライオン
 株式会社丸の内デザイン 株式会社アール 株式会社アールデザイン 株式会社アールデザイン 株式会社アールデザイン 株式会社アールデザイン 株式会社アールデザイン 株式会社アールデザイン 株式会社アールデザイン 株式会社アールデザイン 株式会社アールデザイン 株式会社アールデザイン 株式会社アールデザイン

ついにヴェールを脱いだ天才 横須賀功光の写真魔術 光と鬼

「光と鬼」について(要約) 松岡正剛 Seigo MATSUOKA 編集工学研究所所長

このたび、待ちに待った横須賀功光の写真の全貌が東京都写真美術館で展覧されることになった。生前はむろん、死後、初めてのことになる。

横須賀の写真家としての名声はほとんどデビューとともに時代ときめく光芒を放っていたが、その野心と冒険に満ちた数々の写真作品の試みは横須賀自身の秘めたシナリオもあって、十分に知られてきたとはいえない。それが一挙に公開される。

横須賀は常に時代をリードする、コマーシャル写真やファッション写真の異才として知られてきた。それとともに、肉体を極限まで表現するシリアス・フォトグラファーとして畏怖されていた。しかし、それらのごく一部の横須賀の貌(かお)にすぎず、その作品は、いまこそ語られるべき数々の写真魔術が秘められていた。最初に強調しておきたいのは、横須賀功光には当初から、光と肉体と運動性に関する異様なほどに魔術的な関心があったということである。横須賀は「目の前の物体に光量子がぶつかっている瞬間を見てみたい」とさえ言っていた。また、こうも言っていた。「ほくは“間際”だけを撮りたいんだよ。物であれ物体であれ、これらを極限に追いこむということは、その形感と質感と量感を光と闇の“際”にとらえるということである。このため横須賀はつねに作品の端々に「光の間際」「形の間際」「色の間際」「時の間際」を表現しようとした。また、

海底・砂漠・仏像・神像といったエクストリームな対象世界を撮ることを心掛けていた。山口小夜子という一人の女性を撮り続けたことにも、こうした「極限の中の多様性」や「個性と写真が交じりあう際」をあらわしたいという創作意欲が起爆していた。そういう意味では、横須賀にとってのすべての被写体は、存在の赤裸々な姿を露(あらわ)にする直前の「鬼」なのである。

そして、横須賀はさらに究極的なことに気がついていたのである。それは、写真が写真であること自体に、人間が内なるものを外に露出しようとする行為の究極のありかたが重なるはずだということだった。この「写真が写真であろうとすること自体」に自身の情熱を傾けた作業は、フィルムと光と感光印画紙との出会いそのものに意味を見いだす実験だった。横須賀はたった一人で「光の波束」となって、フィルムや印画紙の中に感光してしまいたかったにちがいない。この思いは、横須賀が若くして傾倒したマン・レイに対して、死ぬ間際まで尊敬を払っていたことにもあらわれている。

他方、横須賀功光には、人生や社会に対しても、家族や仕事に対しても、自身を“間際”に置きつづけたという欲望が渦巻いていたようだ。横須賀は常識を嫌い、極上を好み、極端な揺れ幅のなかで、「切羽詰まった表現者」でありたいという欲望がたぎっていたはずなのである。そういう意味で、横須賀の心身には少年のころから、日大写真科のころから“光”と“鬼”が高速に跋扈していたのである。私はそこに、エロス(生)とタナトス(死)の同時的な享受を願っていた横須賀の心情すら感じる。

いまとりあえず言っておきたいことは、この写真家は異才や異能者ではなくて、正真正正の天才だったということだ。ただ不幸なことに、そのことを一番知っていたのが横須賀功光自身であったということである。そうだとすれば、その才能を分割してでも知るべきなのは、明日のわれわれのほうだということになる。いまやわれわれこそ、横須賀功光が次々に走り抜けた「間際の」「光と鬼」を見る番なのである。



東京都写真美術館

2階展示室(恵比寿ガーデンプレイス内)
 東京都目黒区三田1-13-3 〒153-0062
 tel.03-3280-0099 URL: http://www.syabi.com



JR恵比寿駅東口改札より徒歩7分
 当館には専用の駐車場がありません。
 お車でのご来館はご遠慮ください。